

フランスの皇帝ナポレオンと世界遺産『パリのセーヌ河岸』

～ ナポレオンを描いた2枚の大作 ～



今年2021年は、ナポレオン・ボナパルト（1769年～1821年）没後200年にあたります。フランスでは、ナポレオンにまつわるイベントやセレモニーが開催されることでしょう。今回は、ナポレオンを描いた2枚の大作と世界遺産『パリのセーヌ河岸』との関係性について、述べてみたいと思います。

フランスの皇帝「ナポレオン・ボナパルト」を描いた2枚の絵、『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』と『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』を、一度は目にしたことがあると思いますが、「描いたのは誰？」と聞かれて答えられる人は、意外と少ないのではないのでしょうか。また、この「戴冠式」自体がどこで行われたのでしょうかと聞かれても、こちらもすぐに答えられる人は少ないと思います。

さらに、これら2枚の作品は、実は同じものが複数枚、描かれています。そして、パリ（近郊含む）に在る世界遺産『パリのセーヌ河岸』の構成資産などで展示されています。いかがでしょう。まさに、「知っているようで知らない絵」ではないのでしょうか。



『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』
1802年頃／ヴェルサイユ宮殿美術館蔵



『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』
1805～1807年頃／ルーヴル美術館蔵

まず、描いたのは誰なのか——。

その答えは、2枚とも同じ画家、フランスの画家「ジャック・ルイ・ダヴィット」(1748年~1825年)です。ジャック・ルイ・ダヴィットを簡単にご紹介しますと、18世紀後半、やわらかなロココ主義絵画が隆盛を極めていた時代に、歴史画など過去の時代を尊重する新古典主義絵画へ取り組んだ画家です。弟子には、古典主義絵画の巨匠「ドミニク・アングル」(1780年~1867年)がいます。ダヴィットは、ナポレオンに気に入られ、主席画家となり、プロパガンダ的な作品の制作を任されていました。ダヴィットの噂を聞きつけたナポレオンが、突然アトリエを訪れ、その技量に感銘し、即断即決で作品の制作を依頼した、という逸話があります。おそらく、この画家なら“自分のイメージ通りの作品”を描くだろう、と直感したのだと思います。ダヴィットは、皇帝という、願ってもないパトロンに巡り合うことができました。ちなみ、既に実績と実力が認められての抜擢だったので、周囲からの嫉妬や反論はあまりなかったようです。



ジャックルイ・ダヴィット



ドミニク・アングル



ドミニク・アングル作『グランド・オダリスク』
1814年/ルーヴル美術館蔵

次に、それぞれの作品について、解説させていただきます。

◆『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』について

この作品は、なんと5枚もあります。1800年頃から約5年を費やして描かれました。5枚の作品が展示(保管)されているところは、以下の4箇所です。パリ郊外のマルメゾン城の美術館(1作目)、ベルリンのシャルロットテンブルク宮殿(2作目)、ウィーンのベルヴェデーレ宮殿(4作目)、そして、「世界遺産」であるヴェルサイユ宮殿の美術館に2作品(3、5作目)。5点とも、縦が約260cm、横が約220cmと、かなり大きな作品です。私たちが最も間近に鑑賞できる作品は、パリから日帰りで行くことのできるヴェルサイユ宮殿美術館の2作品でしょう。



①



②



⑤

③



④



『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』の5作品

ヴェルサイユ宮殿美術館に展示されている「3作品目」を見てみましょう。この絵の「角度」に注目してください。ナポレオンのマントや馬の毛が、下から風が吹き上げ、たなびいています。絵画全体が上向きである印象を与え、皇帝の指先や馬の向き、空や雲の動きも右上から左下方向に描くことで、さらに角度が際立ちます。皇帝の指先や馬の向きは右下方向から左上方向に描き、空や雲の動きは右上から左下方向に描くことで交差し、さらに角度が際立ちます。遠くに険しい山岳地帯が、それを超える皇帝の勇ましさを示し、陰影からみると、登る方向に日の光、つまり太陽へと向かっています。この作品は「全てが上昇志向」で、とても勢いを感じる作品に仕上がっています。イメージ戦略としては完璧です。まさに、題名にふさわしい出来栄え。赤いマントと白い馬、紅白のコントラストも、実に見事です。

◆『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』について

この作品は、3万点を超えるルーヴル美術館の展示作品の中で、2番目に大きい作品です。1805年頃から約2年をかけて制作されました。縦が約630cm、横が約930cmの巨大な作品です。ちなみに、ルーヴル美術館の最大の展示作品は、ヴェロネーゼ作『カナの婚礼』(縦約670cm×横約990cm)です。戦利品で持ち帰った『カナの婚礼』が、自身の戴冠式の作品よりも、ほんのひと回り大きかったのは、少々皮肉なことかもしれません。



『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』
1805～07年／ルーヴル美術館蔵

ここまで大きい絵となると、ひとりで完成させることは難しいようで、さすがのダヴィットも助手の手を借りて制作しています。この絵を描くにあたって、画家が最も苦戦したこと、難しいと感じたことは、何だと思われませんか。それは、人物同士の縮尺です。最低でも5mは離れて見ないと、画面全体が把握できないため、人物同士の縮尺を合わせるのが、とても難しいのです。この作品には1箇所だけ、微妙なズレを感じる場所があります。ご覧いただきたいのが、主役のナポレオンとジョゼフィーヌの縮尺です。ふたりの大きさが同じくらいに見えませんか。ナポレオンは身長が低かった、という説もありますが、ジョゼフィーヌを少し大きく描いてしまっています。また、彼女は少し右寄りになっています。画面では、ジョゼフィーヌの方が少し手前に見えるのです。この作品はナポレオンの権威を示す必要があるため、実際の身長そのまま描くことは推定しにくく、また、一般的には、男性の方が大きな体格です。これほどまでの大作でなければ、ダヴィットは修正したかもしれませんが、各人を緻密に描いた後では、修正は困難です。そこが、大作が“大作たる側面”でもあります。システーナ礼拝堂の「天井画」や「最後の審判」なども同様で、ミケランジェロに描かれた人物の大きさは、かなりまちまちです。画面全体が一目で把握できないので、人物の縮尺に微妙なズレが生じてくるのです。とはいえ、絵は本来フリーハンドで描くもの。定規を使って描くものではありません。逆に、フリーハンドで、ここまで正確に描けることに感銘を受けます。こういう作品の方が絵画らしくて、私は好きですね。

ナポレオンから発注された作品である以上、「納期との戦い」も厳しいものでした。自由な制作時間を求める画家にとっては結構な試練で、かのレオナルド・ダ・ヴィンチでさえ、途中で放棄することもあったくらいです。ナポレオンとジョゼフィーヌ、教皇の3人は丹精込めて描かれています。それ以外の人物はそこまでエネルギーを注がれているように見えません。画面中央以外の背景人物は、概ね並べているだけなので、さほど困難な作業ではなかったと考えられます。周辺の人物は、中央の人物ほど緻密には描いてはいません。画面上半分は柱と装飾の占める割合が多く、制作に時間を要しなかったでしょう。丹念に描いているところ、さらっと描いているところがあり、作品に強弱をつけています。ゆえに、中央のナポレオンとジョゼフィーヌに自然と視線が集まるようにもなるのです。一方で、大作には、案外と描きやすい点もあります。それは、小筆で細かに描かなくても良いこと。太筆で大胆に描いても、俯瞰的にみると繊細に表現できているように見えます。細部も太筆で大胆に描けるので、かえって早く描けることも、利点です。大作の方が描きやすい、という画家もいます。納期に間に合わせるためのテクニックを、至る所に気づくことができます。

戴冠式が描かれたこの作品はもう1枚あって、世界遺産「ヴェルサイユ宮殿」に展示されています。この巨大サイズの作品を、1作目とほぼ同じ縮尺で描いています。ダヴィットが驚異的な画力の持ち主であったことは、間違いありません。精緻さ失わずにこれほど超・巨大作を2枚も描いた画家は、ダヴィットをおいて、他にはいないでしょう。ヴェルサイユ宮殿は、『サン・ベルナール峠を越えるボナパルト』と『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』の両方を有する美術館です。その歴史や絢爛豪華な装飾だけでなく、展示作品にも、ぜひ関心を持ってご鑑賞ください。



『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠（2枚目）』
1822年頃／ヴェルサイユ美術館蔵

さて、『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』が実際にどこで行われたか、に答えていませんでしたね。正解は、「ノートル・ダム大聖堂」です（『すべてがわかる世界遺産大事典<下>巻<第2版>』のP.140をご参照ください）。ちょっと脱線しますが、観光バスでの移動中にガイドさんがこの絵を説明した後、ノートル・ダム大聖堂を案内すれば、ツアー客はもっと感激するのに……と思うことがあります。大火災に見舞われたノートル・ダム大聖堂が、早く再建されることを願うばかりです。また、『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』が展示されているルーヴル美術館も構成資産のひとつで、ナポレオンとも深い関わりがあります。諸外国との戦いに勝利し、その戦利品として様々な美術品をフランスに持ち帰り、一時期ですが、1803年に「ナポレオン美術館」と改名されたことがあります。そして、1815年の「ワーテルローの戦い」の敗北後、戦利品の多くが各国に返還された、という歴史があります。

ところで、「ナポレオン最後の戦争」となった「ワーテルローの戦い」。ワーテルローの場所をご存知でしょうか。これも意外と知られていません。ベルギーの首都ブリュッセルの南、約 20 kmに位置しています。戦場はフランスではなく、ベルギーだったのです。残念ながら、ワーテルローは世界遺産に登録されていません。約 200 年前の出来事なので、戦争の悲惨さやその後のヨーロッパの混乱などが風化し、「失われた歴史の 1 ページ」となっているからでしょうか。もし 100 年前の出来事であれば、「負の遺産」として登録されていたかもしれません。それほど、苛烈を極めた戦争だったと伝えられています。ナポレオン率いるフランス軍、対、イギリス、オランダ、ドイツなどのヨーロッパ連合軍。両軍合わせて 30 万人規模となる、ヨーロッパの半分を巻き込んだ大戦争です。戦死者も数万人に及びました。大戦の後は、その戒めもあり、しばらくは穏やかな時代がやって来るものです。この「ワーテルローの戦い」以後、ヨーロッパでは「第一次世界大戦」までの約 100 年間は、大きな戦争が起きていませんし、「第二次英仏 100 年戦争」終結後、現在に至るまで、両国間で戦争は起きていません。

日本で言えば、「関ヶ原の合戦」が終わった後、平和な時代が続いた徳川政権と似ていますね。「関ヶ原の合戦」同様に、「ワーテルローの戦い」はヨーロッパの歴史の分岐点。その後のヨーロッパの勢力図を一変させる“天下分け目の戦い”だったのです。ご参考までに、ワーテルロー古戦場は、関ヶ原古戦場と「姉妹古戦場協定」を締結しています。また、ワーテルロー市は、徳川 家康と豊臣 秀吉が戦った「小牧・長久手の戦い」で知られる長久手市と姉妹都市を提携しています。

『サン・ベルナル峠を越えるボナパルト』のナポレオンの姿は、戦争で進軍の指揮を執るようにも見えます。『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』は素晴らしい作品とはいえ、この作品の光景自体は、あまり好ましいことではありません。というのも、ナポレオンが、カトリック最高位であるローマ教皇を凌ぐ、権力者として描かれています。また、ルーヴル宮殿の美術館に自らの名前を冠したことは、当時の民衆の目には、どのように映ったのでしょうか。先にも述べましたが、これら 2 作品は、ナポレオンの権力を誇示するためのプロパガンダです。ナポレオンを歴史上の偉人として英雄視するだけでなく、実際に当時のヨーロッパの人々や後世に与えた影響はどうであったか、現代に置き換えるとどういうことに繋がるのか、ナポレオン没後 200 年にあたる今年、ヨーロッパの歴史を振り返る良い機会かもしれません。

ナポレオンは、世界遺産「アンヴァリッド」に眠っています。そして、このアンヴァリッドには、ダヴィットの弟子アングルの描いた『玉座のナポレオン』（戴冠式の衣装を身にまとった肖像画）が展示されています。絵画作品の説明にこのような捉え方をする人は少ないでしょうが、絵画からもその歴史を紐解くことで、「世界遺産との関係性」や、その絵画から発信される「戒めや教訓」なども学ぶことができるのです。



世界遺産「アンヴァリッド」

ドミニク・アングル作『玉座のナポレオン』
1806 年／アンヴァリッド蔵